2022 年度地域生活科学研究所　所員助成事業報告書

「子育て支援を考える」

～津山市北園町町内会活動の活性化を通して～

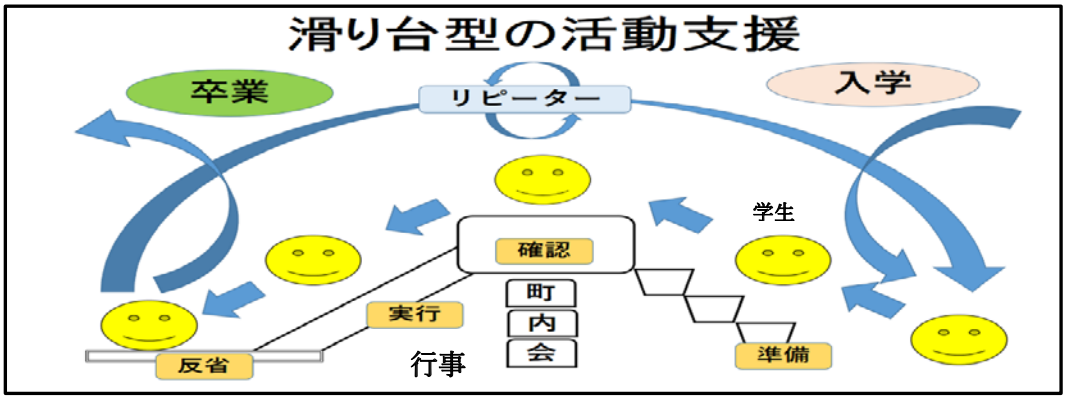
社会福祉学科　有岡道博

1.調査・研究の内容

1）これまでの経過

①第一回全数調査より

2019（令和１）年の北園町全数調査により、北園町の町内会活動の現状や課題を明らかにした。特に、町内会の加入率が下がり、高齢化や担い手不足などの影響で活発な活動ができにくくなっていた。この状況を改善するためにアクションアリサーチを行い、町内会と協力しながら解決方法を検討し、試行した。その結果、多くの学生を活動に導く「滑り台型の支援」を提案することができた。



滑り台の設計図

[設置]（広報・設定）みんなが見えるところに設置

留意点：参加しやすさ　見える化　安全性

[階段]（準備段階）　**集合**　一つずつ一段ずつ進めていく

留意点：着実に　目標を決め　　※途中で引き返すことも可能

[踊り場]（確認）内容の確認　参加者の確認　順番の確認

留意点：※階段を走って登りここから参加することも可能

[滑り板]（実施）活動の実施　楽しさを重視

留意点：長さや（期間）や高さ（難易度）を調整

[砂場]（反省・終了）安全に終了　行事に区切りをつける　**解散**

留意点：反省の場

[メンテナンス]（修理）安全の確認　仕組みのメンテナンス　保険

[管理者]　　町内会・ゼミ

滑り台の利用プロセス

＜1＞入学してきた学生は、地域に興味を持ち、滑り台のそばまでやってくる。

＜2＞全体を把握したうえで、階段に足をかけ、準備を一段一段やっていく。

引き返したり、一段飛びで進むことも可能。

＜3＞踊り場に集まって内容や参加者の確認を行う。

＜4＞期間や難易度を調整しながら滑り板を滑る。

楽しみながら活動を行うことが重要。

＜5＞滑った後は安全な砂場に着地。反省を行って解散する。

＜6＞4 年生はそのまま卒業する。

興味がある学生は、リピーターとして次の年再び滑り台へやってくる。

滑り台型活動支援を回していくためには、学生に代表される「よそ者・ばか者・若者」が役に立つ。学生へのアンケート調査によると、町内会への関心は高いが、実際に活動内容を知り参加しているものは少ない。また、逆に住民も学生が町内会活動に参加することを望んでいるが、働きかけはしていない。出会うきっかけ、すなわちプラットフォーム（滑り台型支援）を作ることが求められていた。

2020（令和 2）年より大学の地元である北園町町内会の協力の下、農業を通して子育て支援と町内会活動の活性化を計画・実施した。大学の地元の町内会でありながら、これまでお互いの関係性、特に学生と町内会とのつながりはほとんどなかった。誰でも見ることができる河川公園に畑を開墾し、住宅地の中に水田を借り、野菜や水稲を栽培することにより、様々なかかわり方ができ、より多くの人に関心を持ってもらえるようになった。この活動を継続することにより、子ども会活動が停滞しつつある北園町の子どもたちに集団活動の場を提供し、社会性や自律性を高めることができた。また、町内の大人の協力もいただくことにより、町内会活動の促進に寄与し、地域が子育てを行う力である「共助力」を育てることができた。そして、学生にとっては、地域の方と計画を企画し実施する過程で様々な実践に触れることができ、大学では学べない学習をすることができ、大学と地域の絆が強くなったと考えている。

②第二回全数調査より

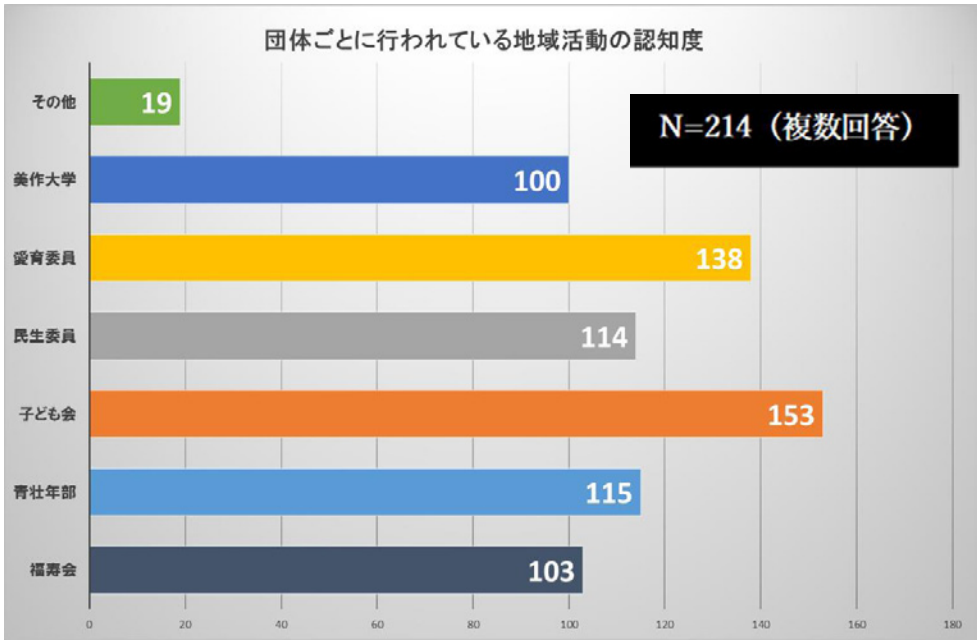
2022（令和 4）年の北園町全数調査によると、北園町内の地域活動の団体別認知度は、子ども会が一番多くなっている。2019（令和 1 年）の調査では現れていなかった美作大学の活動が、46.73％（100 人）【複数回答・回答者数 214】の人に認知されていた。

しかし、活動について知らないという人や、参加したことがないという人もいるというのが現実であり、どのようにして認知度や地域活動への参加人数を増やしていけばよいのかを考える必要がある。

今回の調査の結果から、町内会の活動のうち「町内清掃」や「回覧板」などの比較的参加しやすい活動へ参加している人が多いことが分かった。短時間で終わる活動や準備が必要ない活動などへの参加はしやすいと考えられるため、そのことが結果にも出ている。逆に、事前に準備が必要で大掛かりな活動はあまり挙げられていなかった。例として「サツマイモ収穫」を挙げると、植え付けから、収穫まで長期間にわたって、複数回活動に参加する必要があり、面倒に感じる人も多いのではないかと考えられる。

このようなことから、比較的多くの人が参加する行事や活動の中で住民同士のつながりを作ることが、北園町の町内会活動をより活性化させるために必要なのではないかと考える。回覧板で町内会活動の案内情報を回すだけでなく、町内清掃などの多くの住民が集まる場で次回行われる町内会活動についての情報を共有したり、それぞれの活動の終わりに住民同士でコミュニケーションを図ることができる時間を設けたりすることでつながりは作られ、町内会行事へ参加する人は増えるので

はないかと考えた。



2）活動目的

○近年「少子・高齢化」が顕著になっており、大学のある津山市北園町内も例外ではない。町内会活動や子育て環境が変化している。その顕著な例が子ども会活動の縮小化である。その課題解決に、これまで有岡研究室で行ってきた「離島の子育支援」の研究成果が活用できると考える。

○地域活動は町内会だけに求められるものではなく、幅広い年齢の住民すべてに求められる。しかし、2度の全数調査ともに「参加しやすい場がない」「きっかけがない」「定期的に参加することは難しい」など参加の意識はあるのだが、機会が少ないという意見が多く見られた。この活動を行うことにより、地域活性化のきっかけとなるプラットフォームができ、子どもからお年寄りまでそれぞれが、自分に合った自由なかかわりができる場が提供できると考える。

○この活動は、大学と地元町内会の結びつきを深めるとともに、子どもへのかかわりを通して大学の持つ機能を地域に還元する取り組みとなり、大学の運営についても寄与すると思われる。

2.活動の具体的内容

1）みんなの畑・芋苗の植え付け

5 月 22 日(日)、学生 14 名と、北園町内会の子どもと大人 40 名以上が河川公園に集まり、「みんなの畑」に芋苗の植え付けを行いました。「みんなの畑」は町内会の管理する河川公園の一部をお借りして畑として開墾したものです。畑のすぐ横には子どもたちの親水広場もあり、休日は憩いの場となっています。

この日は、大変暑い日でしたが、子ども達が一生懸命取り組み、短い時間で終了することができました。作業の締めくくり

に参加者の名前を看板に書いてもらい、畑の横に立てました。

２）みんなの田んぼ・田植え

５月２９日（日）　学生１６名と子ども２３名、大人１６名の合計５５名で津山市神戸の水田（みんなの田んぼ）の田植えを行いました。
今年一番の暑さの中、子ども達は全身泥だらけになり、泥んこプールを楽しんだり、用水路で魚やエビを追って楽しんでいました。なかなか集中できない子ども達ですが、中には最初から最後まで田植えをする子もいました。主役の大人たちは、熱さの中での田植えに悪戦苦闘し、お昼のバーベキューを楽しみにようやく 12 時ちょうどに終了しました。

３）プチ収穫祭

7 月 17 日（日）10 時～14 時　プチ収穫祭を行いました。参加者は、町内の子ども 8 名、保護者 6 名、学生 19 名、教員 1 名の 34 名でした。　最初に子どもを中心に野菜の収穫を行いました。収穫後は、野菜を調理するグループとハンゴウでご飯を炊くグループに分かれて活動しました。調理グループは夏野菜カレーとサラダつくりに挑戦しました。ハンゴウグループは、火起こし器で火起こしに挑戦しハンゴウを焚きました。

ごはんにカレーをかけてみんなでいただきました。ごはんの後は河川敷でスイカ割りを行いました。天気も晴れたり曇ったりでちょうどよく、おいしくスイカを食べることができました。

４）みんなの田んぼ・稲刈り

9 月 24 日(土)、学生と地元町内会子ども会が、院庄の作楽神社横の水田で稲刈りを行いました。
この日は、子ども 9 名、保護者 8 名、町内会役員 1 名、学生 10 名、教員 1 名の 29 名が参加しました。
子どもたちの大半は小学校低学年、幼稚園、保育園の子ども達でした。しかし、学生と一緒にカマを握ったり、お父さんの刈った稲を運んだりと大活躍していました。

刈った稲は、田んぼの端にビニールハウスの鉄パイプを利用してハゼ（稲の束をかけて乾かすもの）を作って干しました。慣れない手でパイプを扱っているのを見かねて、近所の方が木製のハゼを提供してくださいました。近所の皆様に様々な面で助けていただきました。
2 週間後には脱穀、11 月には収穫祭、12 月にはお餅つきと毎月行事が並びます。これらの行事に“みんなの田んぼ”で育てたお米が使われ、みんなで育てた成果を味合うことができます。

５）みんなの田んぼ・脱穀

10 月 8 日（土）　天気の関係で日程を変更したため、当日は学生 7 名、子どもと家族 4 名、町内の方 1 名で脱穀を行いました。ハゼで干しておいた稲をみんなでリレーしてコンバインに運び、脱穀をします。

びっくりされるとは思いますが、コンバインの前後左右の運転は子どもが毎年担当します。今年は保育園の年長さんの子が、大人の指示の下でレバーを引いたり押したりしました。押すと前に進み、引くと後ろに進みます。最初は恐る恐る乗っていた子どもも途中から自信がついて得意そうです。

もっと小さい子は、ワラグロを積むとき上に乗り踏み込んでもらいました。脱穀したワラを学生が運び、子どもがそれを踏んでいきます。徐々に丸い形の円筒ができ、子どもも満足そうでした。

今年は干した稲の数も少なく 1 時間半ほどで作業は終了しました。おやつを兼ねて、栗ご飯のおむすびとおでんをいただき解散しました。

６）みんなの畑・芋ほり

１０月 16 日（日）大学横の宮川河川敷で芋ほり会を行いました。参加者は町内会の役員の方をはじめ、子ども会、町内外の親子など 60 名程度、学生は 3 年生を中心として 20 名、全体で 80 名を超える大きな行事となりました。

今年は雨が降らず水やりに苦労しました。しかし、高温のおかげもあってとても立派な芋ができました。子どもの頭ぐらいあります。子どもにはなかなか掘ることも難しく、お父さんやお母さんも交えて真剣に取り組んでいました。驚いたことに、まだまだ石の多い畑ですが、石があっても芋はその下にまで変形しながらも伸び、石を抱き込んでいるような芋も多くありました。1 時間余りの奮闘の末 200 キロ近くの芋が収穫できました。収穫した芋は参加者で分け、残りは後日焼き芋にしました。最後に、学生が前日準備したサツマイモの入った豚汁（100 人分）をみんなで味わい、作物を育てる大切さを実感しました。

７）子どもふれあいお餅つき会

12 月 4 日(日)　学生 20 名と北園町内会の方 10 名、町内外の親子約 50 名が北園会館(津山市北園町)にて「子どもふれあいお餅つき会」を実施しました。市内の親子と一緒に育ててきたお米をもち米と交換し、30 キロのもち米を手に入れました。そして、田植えや稲刈り、脱穀に参加してくださった町内外の親子に呼び掛け、町内の方もお誘いしてお餅つき会を行いました。木の臼と杵を使い、昔ながらに掛け声をかけながら 16 臼をつきました。

重たい杵に子どもたちは戸惑っていましたが、一生懸命頑張っており、大人と子供の共同作業でどんどんお餅をついていきました。つけたお餅は建物の中で、お年の方から、お父さんやお母さん、小中学生、2 歳の幼児まで一緒にま

るめました。お餅のまるめ方は、お年の方が最初に教えてくださいました。できたお餅は、持ち帰り用パックに詰めていきます。途中で休憩し、できたてのお餅にあんこをつけて食べたり、きな粉をつけたり、お汁粉に入れたり、おろし餅にしたり、果ては炊き上がったもち米にお塩をかけて食べたりと様々な体験をしました。また、中華まんや焼き芋もあり、お昼前なのにお腹一杯になりました。

お餅ができた後は、子どもたちと学生で「けいどろ」で追いかけごっこをしたり、遊具で遊んだりしました。普段はあまり交わる機会がない子どもたちも学生もすっかり仲良くなって時間いっぱい遊んでいました。住民と学生、子どもたちとお母さんとお父さん、みんながそれぞれにふれあいながら行事を楽しむことができました。

3.研究活動の成果

「結果について」

２０２１年度と比較して、各活動への参加者数が増加した。２０２０年度の調査にあるように、美作大学による活動の認知が向上したことも影響している。幼児から高齢者まで参加者の年齢の広がりが見られた。また、ゼミ生以外の学生の参加が増えた。そのため、3 世代交流行事として始めた活動が、実際には「子ども」「学生」「親世代」「高齢者」の 4 世代交流交流行事となっている。

SDGs の理念をもとに、食物の循環を体験する取り組みは、農業を柱に芋の栽培（植え付け→栽培→収穫→焼き芋)、水稲の栽培（田植え→栽培→稲刈り→脱穀→おにぎり→お餅つき）を 4 世代が協力して行った。食物の栽培を通して自然と触れ合うことによって、子どもたちに様々な刺激を与えることができた。自分の植えたものが口に入り、味あうことによって達成感を得たり、農作業のリスクを減らすためのルールや方法を知ったり、集団で作業する楽しさや必要性を体験したりすることができた。

「だれでも・いつでも参加できる活動を目指して」

２０１９年２０２０年の調査では、町内会の活動を活性化するために「だれでも・いつでも参加できる活動」を増やしてほしいという要望が多かった。参加しやすい環境を整える　ため、ゼミの学生を中心にプラットフォームを作り企画・準備・実施・片付けを行ってきた（前記すべり台型支援)。町の主催行事ではあるが、企画・準備は学生中心に行い、当日は協力できる町内会役員さんに手伝ってもらい実施した。片付けなどはほとんど学生で行った。役員さんは気軽に参加できたようで、途中参加の方もいた。運営の中心はゼミ生が担い、ゼミ以外の学生は当日のみの参加であり、参加しやすかったのではないかと思われる。

しかし、ゼミ生には負担が多く、この活動以外の活動もやっており、学業やバイトのはざまでかなり負担があったと本人たちも訴えていた。役員の負担感を軽減するのが目的ではあるが、学生に負担が移動しているだけではないかとの意見もあった。ゼミ単位でのプラットフォーム化は困難であることが分かった。学生の人数も限られ、教員の移動もある。少子高齢化社会が続く中で町内会活動の継続性を左右するのはマンパワーである。学生はこの課題の一つの回答ではあるが、4 年間の賞味期限があり、そのうえ授業やテストもある。最初の設定では、学生がプラットフォームを担っていくとしていたが。この 3 年の実践から難しいと感じる。また、もう一つの課題は、プラットフォームの主体性である。時に町内会・学

生・教員の間で曖昧になってしまうことがあり、定期的な会議を行い補完していくとしていたが、年 1 回しか持てなかった。

町内会活動の活性化に苦慮している町内会は少数ではない、むしろ津山圏域では多数と思われる。しっかりした構造のプラットフォームが求められている。そこで、美作大学ボランテイアセンターの活用を提言したい。今ある機能を拡張して地域のプラットフォームとすることができれば、北園町だけでなく、津山圏域の町内会にとって心強い味方となることであろう。また学生の社会学習の場も拡大すると思われる。ぜひ検討していただきたい。